

vol. 11

選書者：増田 匡

(神戸市中央区長)

●『アーバニスト』 著者：中島直人、一般社団法人アーバニスト

数年前にアーバニストの活動をされている一般社団法人 for Cities の代表理事のお二人と知り合ったことをきっかけに、この本と出会いました。私自身、建築を学び、まちづくりの仕事に長く携わってきました。また、都市に住み、都市を楽しんでいます。その中で、自分の住むまちの居心地を良くしようとする働きかけが、まさに「アーバニスト」としての活動であると、この本を読んで認識しました。

●『ちいさいおうち』 著者：バージニア・リー・バートン

ちいさいおうちが周辺環境の大きな変化の中で、空き家として存在し続け、最終的にはハッピーエンドを迎えるお話です。まち歩きしていると中央区内でも高層ビルの狭間で素敵な佇まいの空き家を見つけることがあります。この本のような解決は難しいでしょうけど、その場でその地域に良い影響を与え続けられるような良い活用方法を見出すことができるのではと希望を持たせてくれます。

●『きことわ』 著者：朝吹真理子

あの頃は何故か文学賞受賞作ばかり読んでいました。この本とは2011年の第144回芥川賞受賞作として、深い思い入れもなく出会いました。時間の流れも空間も入り混じり合う物語とリズム良く美しい文章に心が惹かれ、初読から5回ほどは読み返しています。朝吹真理子さんの文章は句読点や漢字の使い方が絶妙で、作者の狙った箇所を注意深く読むように誘われているかのように感じます。

●『時間は存在しない』 作者：カルロ・ロヴェッリ

相対性理論を知ったのは高校生の時です。時間が空間と関わり合い、絶対的な尺度ではないことを知り衝撃を受けました。それから40年が過ぎ、装丁が気に入って、ジャケ買いをしたこの本で、あの衝撃が再び訪れました。時間が絶対的なものでないと知ったとしても、普段の生活には何も影響がありません。ただ、通常の認識を超えた世界に触れることで、何かが変わりそうな予感がします。

●『美しき日本の残像』 著者：アレックス・カー

外国人向けの不動産を扱っている友人に勧められた本です。外国出身の作者ならではの独自の視点と丁寧な描写で伝統的な日本の美しさが語られます。その一方で、現代の日本の風景への失望にも溢れています。まちの魅力はその歴史と文化の延長線上にあります。豊かな自然や伝統的な家屋など残すべきものを再認識させられます。